



TITLE:

<教授論文> 「現実」 に対する責任

AUTHOR(S):

小野, 紀明

CITATION:

小野, 紀明. <教授論文> 「現実」 に対する責任. 公共空間 : 政策の現場から最前線を伝える情報誌 2015, 14: 41-43

ISSUE DATE:

2015

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/216806>

RIGHT:

© Kokyo-Kukan Editorial Committee, Kyoto University School of Government; 本誌掲載の写真・イラスト・記事の無断転載・二次利用はお控え下さい.

「現実」に対する責任

前書き

私は、本年三月をもって京都大学を退職した。長年にわたって公共政策大学院で「現代規範理論」(最初の二年間の授業名は「公共哲学と現代統治」であったが、内容は同じであった。)を担当してきた。「公共空間」に小文を依頼されたので、毎年の授業の中で必ずお話ししてきたことを改めて披歴することで責をふさぎたい。政治思想史の研究者として実務家を養成する専門職大学院で教える自らの覚悟を語り、その上で受講生の思考を触発するつもりで、与太話の体裁をもって語るのが常であった。規範理論の小難しい解説をした後で、「今までの話は全部忘れてください」という場違いな言葉が始まる一幕を覚えておられる受講生もいらっしやるであろう。大部分のひとは「何をけつたいなことを」と苦笑しながら聴いていたが、自分としては規範理論の根幹に関わる、そして思想史研究者のアイデンティティに関わる重大な問題に触れているつもりであった。

※

まず、規範理論の根幹に関わる二つの問題を指摘しよう。

第一の問題。すべての学問は、「感性」によつ

て認知される目の前の具体的事象から距離をとつて、普遍的なレベルにまで高まっていこうとする「知性」の所産である。我々は、ともすれば自分の周りの狭い出来事に囚われて、物事を広い視野から考察することを怠ってしまう。とりわけ日常生活のレベルではそうである。従つて、高等教育の府である大学や大学院では現実のもたらす千差万別の感性的違いを可能な限り無視して、きわめて抽象的な理論を展開することを学ぶことになる。しかし、個々の市民に関わる実務に直結している専門職大学院にあつては、事はそう簡単ではない。純粋に抽象的なレベルにおける頭でっかちな議論などは、実務においては百害あつて一利なしである。しかし、他方で、すぐ実務で役に立つ有用な知識を授けるだけならば、今日学部以上の大学院教育が要請される必要もないであろう。専門職大学院では、思想・哲学のような高度の抽象的な知識の涵養が期待されているのである。そこで、公共政策大学院をはじめとする専門職大学院で養成すべき高度専門職業人にあつては、現実から遊離した抽象的知識の習得を目的とするのではなく、かといって実務一点張りでもなく、「知性」と「感性」、そして机上の「理論」と日々の「実践」の両者のバランスのとれた教育を施すことが求め

京都大学名誉教授 小野 紀明 氏

られていると言われるのである。その意味で、専門職大学院の教育の中心をなすのはケース・スタディ(事例研究)なのである。

第二の問題。今度は人文科学と社会科学という区別について考えてみよう。社会の中に住まう自己という存在を考えてみると、人文科学の主要な問題が自己にあるのに対して、社会科学のそれは社会にある。勿論、両者は切り離しえない関係にあるとはいえ、最終的に考察されるべき対象は各々異なるのである。そして、専門職大学院において教授されるべき知識は、私とは何かという青臭い問いへの解答ではなく、「自己」への関心を捨象した法律のような一般的ルールという「社会的制度」についての即物的な解答である。しかし、ここでも重要なことは、人文科学か社会科学か、「自己」か「社会的制度」という二項対立的な問題設定に立つことではなく、両者が交錯する領域に眼差しを凝らすことであり、それこそが両科学の狭間に位置する政治思想史・規範理論の特質なのである。つまり、規範理論は、実存的な問いが政治的制度へと昇華していくプロセスに探究の眼差しを向けるのである。単なる実務家ではなく高度専門職業人を養成する専門職大学院に、政治思想史の研究者が担当すべき規範理論が置かれて

いるのは、まさにこの故なのである。

以上、二つの連関する理由、即ち、普遍的「理論」と具体的「実践」を架橋することと「自己」への問いと「社会的制度」への問いを架橋すること、これが公共的職業に従事する人材を、それとは対極に位置する政治思想史の専門家が教育するという京都大学の公共政策大学院の理念の根幹にあるものである。そして、この理念は現代の学問一般に共有されている。例えば一九六〇年代以降の政治思想史を捉えた問題意識の一つは、ファシズムという未曾有の悲劇の根本的原因是、プラトン以来、二千年以上にわたって西洋が営々として築き上げてきた合理主義、即ち、人間を物として扱い即物的な普遍的知識を目指す理論優位の考え方にあつたのではないかという疑問であつた。「実践概念の復権」と呼ばれる、今日の規範理論の趨勢である。公共的な職務の遂行に従事している者にとって重要なことは、一方で、自分の実存的問題を捨象して人間を数字へと還元する知的な「理論」と、他方で、市民一人ひとりの苦悩を自らの問題として引き受ける豊かな感性的「実践」の、両者を兼ね備えることなのである。私のような政治思想史の研究者が本大学院の設置メンバーとして、そして基本科目の担当者として一貫して教育に携わってきたのは、今日の規範理論が共通に主張するこの理念に基づいているのである。私

は、常にこの理念を強く意識して授業を行ってきたつもりである。功利主義批判から出発する現代規範理論は、功利主義に西洋合理主義の典型を見るのである。

さて、ここからがこの小論の眼目である。「今までの話は全部忘れてください」という私の言葉は、従来の規範理論における「理論」偏重を改めて、「理論」と「実践」の両者の調和こそが望ましい、という現代規範理論に共有された主張を否定しなさいと言っているに等しいであろう。一体、これはどういうことであろうか。実務家は、オフィスにこもってデータへと還元された物として人間を扱え、頭がよいだけの血も涙もないモンスターになれ、と主張しているのであるか。ある意味では、そうである。なぜならば、実務家、とりわけ本大学院で養成している公共的な職務に携わる高度専門職業人（たとえば悪いが、役所の窓口で切々と訴える市民の相手をする公務員ではなく）には「現実」に対する責任があるからである。無論、ここでの「現実」とは、将来に設定された理想のユートピアと対比されている。

「現実」に対する責任、それは第一に、目の前の事態に一般的ルールをもつて対処しなければならないという責任である。無限の違い——最近の規範理論が強調する「差異」——をもつ事態と当事者に対して、公共的職務に携わる実務家は共通の

ルールで対応することが求められているのである。「差異」の尊重を強調する最近の規範的立場にもかかわらず、公共的な事柄についてはやはり平等が何よりも要求されるべきなのである。その結果、平等に扱いうる部分だけが救済されることになるが、それも止むを得ないのである。

現実に対する責任、それは第二に、目の前の事態に迅速に対処しなければならないという責任である。両立不可能な選択肢を前に、両当事者を共に幸せにしようと徒に時間を無駄にすることはできない。理想を追求している間に、事態はますます悪化するかもしれないからである。無情な選択の結果、不幸に陥った当事者に満腔の同情を寄せることは宗教家の役割ではあつても、けつして公共的職務に携わる実務家の仕事ではないのである。あるいは、理想ばかり喋々している無責任な大学の研究者とも、彼らは違うのである。

「現実」に対して責任ある決定を迫られる実務家は、以上の二つの理由から敢えて人間を物として扱う非情さが必要なのである。これが、実務家を養成する本大学院の授業において私が、政治思想史研究者としての自らの信念を裏切つてまで非情さを求める理由である。逆に、象牙の塔という安全な避難所から託を並べているだけの私には、この非情さを引き受ける覚悟が決定的に欠けているのである。妙にヒューマニズムを振り回す



小野 紀明
おの・のりあき

一九四九年東京都生まれ。京都大学名誉教授。初代京都大学公共政策大学院院長（二〇〇六～二〇〇七年）。専門分野は西洋政治思想史。京都大学法学修士（一九七五年）、同法学博士（一九八七年）。一九七六年～一九七七年まで京都大学法学部助手。一九七八年～一九九四年まで神戸大学法学部助教授・同教授。一九九五年から京都大学大学院法学研究科教授。二〇一五年、定年退官。著書に『フランス・ロマン主義の政治思想』（木鐸社、一九八六年）、『西洋政治史講義 精神史的考察』（岩波書店、二〇一五年）など多数。

人間が公共的な仕事に就くと、事態を一層悪くすることは、歴史が証明している。炯眼な諸君は、私がマックス・ウェーバーを念頭においていることにすぐに気がついたであろう。彼は、自らの信念に殉じる覚悟とも言ふべき心情倫理——迷える子羊に寄せる無限の愛はその典型である——と、魂の秩序ではなく現実のそれを守り抜こうとする責任倫理——一匹と九九匹の子羊の命の重さを秤にかけて、前者を見殺しにしてまで後者を守ろうとする非情さ——の両者を兼ね備えることを政治家に求めながらも、両立が不可能な場合には迷うことなく

後者をとる勇気を政治家に要求したのである。



最後に蛇足を一言。小論では、公共政策大学院で学ぶ諸君に求められる非情さへの覚悟について強調してきた。それは、政治家や役人にひとが抱く悪役のイメージに合致するものかもしれない。本大学院の学生には、誤解を恐れずに悪役を引き受ける覚悟がいるのである。しかし、先に述べたように本大学院に「現代規範理論」が置かれている理由は、善玉としての政治家や役人の復権であ

る。それはまた、本来は理想を追求する政治思想史の研究者である私の意図でもある。悪役になるのはギリギリの限界状況に追い込まれたときである。通常の状態にあつては、可能な限り市民一人ひとりの存在に思いをいたしながら仕事を行うべきなのである。小論の結びとして、授業で強調しているこの当たり前のことを、改めて確認しておきたい。